



～お葬儀屋さんのひとりごと～

葬にまつわる体験談集

■ お布施の中身は空っぽで [埼玉県 男性 35歳]

葬式に隣組の手伝いはつきものだ。事件は私が隣組の組長をしていた時に起きた。近所のおじいさんが亡くなられ、組長なので、現金20万円と印鑑を喪主から手渡された。そのお金で、葬儀にかかる雑費を支払ったり、死亡届けを提出する仕事を仰せ付かった。

しかし私は隣組の組長の仕事がどんなものかはよく知らず、年配の方に教わりながら手伝いをするようになった。現金を預かったからには、領収書を貰わなければいけない。ところが、墓守や火葬場の人、霊柩車の運転手に、御清めとして渡す寸志など、どうしても領収書をもらえないものがあつた。

この事については、喪主の方から、組長さんが香典袋に入れて渡してほしいと頼まれていたので、特に問題はなかった。葬儀も無事に終り、喪主の家を片付けている時だった。お寺から電話があり、お布施が入っていなかったというのだ。それを聞いてドキッとした。喪主からは、香典袋に喪主の名前を書いておくことは頼まれていたが、お金は、喪主が入れて持って行くものと思っていた。ところが喪主の方は組長の私にお金も入れておくよう頼んだ気になっていたのだ。だから喪主は空のお布施をお寺に持って行ってしまったというわけだ。

どこにでもありそうなトラブルだが、喪主と隣組の組長である私との間で、きちんとした打ち合わせをする時間がなかったために起きた手違いだと言える。葬儀はゆっくり打ち合わせをしている暇などない。私の方から話しを持ちかけ相談するべきだった。まだまだ尻の青い自分を感じ恥かしかった。



■ お見舞いの難しさ [神奈川県 女性 27歳]

昨年母が検査と手術のため3ヶ月程入院していた。親類、母の友人、近所の方々と色々な方々がお見舞いに来て下さった。その中で実感したのは、「見舞い」とはとても難しいものであるということ。

それは見舞いに来て下さるかたは健康であるが、母は病人であるということ。家にいる時のように心や体が落ち着いているわけではないのだ。他人に病気の姿を見せたくないと思ったり、人と話したくない時もある。明日の検査で悪い結果が出たらどうしようと不安で仕方ない時もある。それなのに時間を選ばずやってきては長時間話しをしていく見舞い客に対して、病人は無防備だ。どうすることもできない。見舞い客の帰った後、疲れて眠る母を見て、見舞いに来ること（行くこと）は、はたして

良いことなのか悪いことなのかを考えさせられた。また色々とお見舞いの品を頂戴したのだが、絶食検査中の時の食べ物類（特に生もの）、きれいだが頭がくらくらしそうに強い香りのお花、同じような病気の人が書いた闘病記など、お心づかいは本当にありがたいのだが、それでも困ってしまうものばかりだ。そんな中で、大変気のきいたお見舞いの品だと思ったのが母の友人の方が贈って下さったテレホンカードの3枚組セット。かさばらず腐らず、見て良いし使って良しと実用的。病院から毎晩家へ電話をする母には大変役立ったそうだ。

それともう一つ。食欲のない母に少しでも御飯が食べられるようにと、塩分ひかえめの大変おいしい梅干を1箱。こちらも母の友人が贈って下さったものだが、この梅干のおかげで食欲が出たと母は言っている。

母の入院を通して、私は自分が見舞う側に立った時に気をつけなければいけないことを身をもって体験したと思っている。

